

# 平成元年度総会 母校農学校舎で開催



(題字は稲川先生)

第31号  
平成元年9月30日発行  
三翠化学会  
津市上浜町1515  
三重大学農芸化学コース内  
電話/津(0592)32-1211  
振替/名古屋9-59345  
印刷/株式会社ある  
☎(051)332-0861 大8長谷川正一

## 渡辺会長を再任 熊澤学部長の講演も

平成元年度三翠化学会総会が去る五月十四日の日曜日に三重大学生物資源学部農学校舎大講義室で開催された。

当日は会員五十七名が参集し、来賓として生物資源学部長熊澤先生、三重大学三翠同窓会長菊岡武男先生(主9)、北岸先生のご出席をいただいた。菊岡・北岸両先生の来賓挨拶のあと、司会者杉崎護氏(大16)のもとで議長に西山正之氏(大1)、議事録署名人に升井洋至氏(大32)を選出し、西山議長のもとで議事に入った。

昭和63年度事業報告を古市幹事、同決算報告を西川幹事、監査報告を中川監事(専2)が行い、続いて、基金の庶務・会計報告を高橋委員から、その監査報告を若林監事(専1)が行い、いずれも異議なく承認された。次に、平成元年・二年度役員

暫時休憩ののち、講演会に入った。講演会講師の生物資源学部長熊澤善三郎先生を嶋林理事(専1)が紹介して、先生の講演「生物資源学と農芸化学」を拝聴した。講演会終了後、出席者全員が校舎玄関前に移動して記念写真を撮り、正午をすぎ、懇親会場の学生食堂へ向かった。懇親会は、菊岡、北岸、熊澤の三先生に加えて梅林、柏村、奥村の三先生をお迎えし、升井氏(大32)の司会、会長挨拶、別府東海支部長(専1)の乾杯でパーティーが始まった。宴半ばにして、クラス対抗

## 会長挨拶

昭和から平成に、農学部から生物資源学部にそれぞれ名称が変わりました。国内外の急速なる変化とは関係なく三翠化学会が再度会長留任をおおせつかりました。このことは三翠化学会の今後を考えた場合、私個人としては世代交替があつてもよかつたのではないかと思ひ、会員の皆様も同様なお考えをお持ちのことと思ひます。

前期二年間を顧みれば、学部の諸先生方の並ならぬ御奉仕と東海支部の会員の方の御協力、更に三重支部の一部会員の御尽力により何とか二年間を乗り切つて参りました。このことから三翠化学会の今後の有り方について紙上をお借りして、反省やら問題点を申し述べたいと思ひます。一、総会について 三翠化学会発足以来、いつも総会担当理事の方々が頭を悩ますのが、総会出席の人員であります。発足当初に比べ、会員が千数百名になつたにもかかわらず、逆に出席人員は減少傾向にあり、東海支部との協力により最低人員を確保することにより

### 三翠化学会昭和63年度決算報告

(単位:円)

1. 収入の部		2. 支出の部	
項目	決算	項目	決算
前年度繰越	515,076	会報印刷費	600,000
国債利息	800,000	郵送通信費	136,157
雑収入	14,924	会費	150,000
預金利息	3,936	人件費	68,000
		三翠化学会費	30,000
計	1,330,000	事務費	50,000
		計	835,717

差引残高 -25,998 (次年度繰越分)

### 三翠化学会平成元年度予算

(単位:円)

1. 収入の部		2. 支出の部	
項目	予算	項目	予算
前年度繰越	-25,998	会報印刷費	350,000
国債利息	881,000	郵送通信費	180,000
雑収入	5,000	会費	120,000
預金利息	5,000	人件費	80,000
		三翠化学会費	30,000
計	865,002	事務費	55,002
		計	865,002

### 三翠化学会基金決算報告 (平成元年3月31日)

(単位:円)

●収入の部		●支出の部	
前年度繰越	1,912,608	支部補助	80,000
国債利息	28,984	同上送料	2,010
郵便貯金利息	2,020	総会補助	23,350
		こうより補助	38,000
		卒業記念品費	38,000
計	1,943,612	計	177,360

●差引残高 1,770,252  
●基金管理内容 定期郵便貯金(20万×8口) 1,600,000  
郵便貯金 170,252  
計 1,770,252

## 三翠化学三重県支部 総会開催報告

三翠化学会の運営が成り立っているといつても過言ではありません。しかし、金銭の低下、補助額の増加等により基金も漸減して参り、今後再検討する必要があります。以上三点以外にもいろいろ問題点が考えられますが、要は会員諸氏の御協力により、三翠化学会の今後の発展につなげていきたいと思ひます。(専1 渡辺和己)

去る五月十四日、三翠化学会総会に引き続き本支部総会を開催しましたので、その概要を報告します。

一、概況報告 昭和六十三年度は三重大学付属農場で総会後化学会と合同で焼肉パーティーを実施したが、本年度以後の行事については、新役員特に若手の方々の企画を待つて行いたい旨、支部長が報告。二、役員改選 平成元年、二年の二か年間の三翠化学三重県支部及び三翠化学三重県支部連絡協議会の役員を次のとおり決定した。

以上選出された方々には、誠に御苦勞ですが三翠化学会の発展のために二か年間、県支部及び連絡協議会の役員として、御協力下さるようお願い申し上げます。(佐々木敏雄記)

### 昭和63年度事業報告

昭和63年4月15日 第1回役員・評議員会および基金運用委員会  
4月24日 昭和63年度総会(三重大学生物資源学部付属農場)  
7月15日 第2回役員・評議員会および基金運用委員会  
9月30日 会報第29号発行  
平成元年1月27日 第3回役員・評議員会および基金運用委員会  
3月31日 会報第30号発行

### 平成元年度事業計画

平成元年4月28日 第1回役員・評議員会および基金運用委員会  
5月14日 平成元年度総会(三重大学生物資源学部)  
7月 第2回役員・評議員会および基金運用委員会  
9月 会報第31号発行  
12月 第3回役員・評議員会および基金運用委員会  
平成2年2月 第4回役員・評議員会および基金運用委員会  
3月 会報第32号発行

### 平成元・二年度三翠化学会役員・評議員

三翠化学三重県支部		三翠化学三重県支部連絡協議会	
役職	氏名	役職	氏名
支部長	佐々木敏雄 専2	会長	渡辺和己(専1)
副支部長	市川淳 専3	副会長	原田俊夫(専3)
理事	市川淳 専3	理事	今西勝(専1)
幹事	今井明大 大4	幹事	岡田久司(大3)
幹事	近藤清夫 大2	幹事	寺沢三重 大3
幹事	鈴木幸郎 専3	幹事	三井智(専1)
幹事	鈴木幸郎 専3	幹事	板谷昇次(大5)
幹事	鈴木幸郎 専3	幹事	今西宣博(大19)
幹事	鈴木幸郎 専3	幹事	白井英治(大33)
幹事	鈴木幸郎 専3	幹事	高橋孝雄(大6)

# きき酒会の記録

総会に続いて生協食堂において「きき酒会」を行った。三名一組となり約二十組が参加した。

概略は以下のようであった。

一、出題者  
三重県工業試験場 鈴木部長、坪内課長

二、賞品  
井村屋製菓、ヤマモリ

三、順位  
一位 教官B(奥村、柏村、梅林)

二位 大20回(西川、渡辺、田中)

三位 大1回(岡本、福田、吉田)

〇位 大32回(升井、原夫妻)

個人上位者  
八点満点・奥村(教官)  
六名・北岸(教官) 柏村(教官) 中川(専2) 鳥羽(大2) 石原(大7) 小畑(大15) 杉崎(大16) 西川(大20) 中北(大27) 向原(大34)

四、総評  
鈴木・坪内両氏のお世話で楽しませていただきました。この遊びの中で感想を一言。若き鋭敏なバイオセンサー奥村教官。未だ感度の衰えぬ北岸教官。女性上位の杉崎夫妻(大16)。酒ならば味はどうでもよい専1の諸兄。上位11名中に三重大学教官が五名はナゼ? 点数は気にしないで次回にはまた陽気にやりましょう。(嶋田記)



優勝のよるこびに笑う教官Bチーム  
(中央で偉そうにしている奥村教官の頭にはバイオセンサーが立っている)

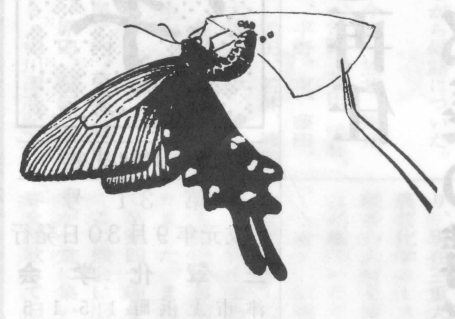
# 虫に魅せられて

(農芸化学会奨励賞受賞記念のため投稿を依頼した)

昭和47年卒 西田 律夫

今はほとんど姿を消してしまつたが、私が学生であつた二十年前にはキャンパスの付近にもジャコウアゲハという大型のアゲハチョウが優雅に飛んでいて、アゲハが幼虫時代ミカン科植物に寄生するのに対してジャコウアゲハはウマノスズクサという蔓草のみを食草としていた。これらの母蝶は、自分の寄主植物を的確に探し、幼虫の好みそなう若葉に卵を産みつける。いったい何を手がかりに産卵対象となる植物を正確に見つけ出しているのだろうか。このような疑問を抱いたのはちょうど

うどその頃であつた。学生実験の合間にウマノスズクサの葉をアルコール抽出してみた。その抽出エキスを濾紙片に浸し、自分の部屋に放つていたジャコウアゲハに示すと、チョウは狂つたようにその濾紙片に卵を産み始めた。同様のことをミカン葉の抽出物で行うと、この場合はアゲハに対してだけ産卵を促した。抽出エキスの中に産卵を刺激する特異的な化学成分があることは疑いない。興奮した足で、さっそく熊澤先生に相談したところ、卒論のテーマとして快く認めて下さつた。産卵刺



食草ウマノスズクサの抽出物を浸した濾紙片に産卵するジャコウアゲハ (イラストは筆者)

激因子は当初揮発性物質と考へられていたが、意外にも水溶性であることが判明した。しかし、どういふ訳か、その化学的挙動は気まぐれで、分離・精製を進めてゆくうちに所在がわからなくなつてしまつた。試行錯誤の末、結局目的物質の単離に至らぬまま卒業式を迎へてしまつた。

その後、昆虫生理活性物質の研究に先駆的であつた京都大学農学部付属農業研究施設大学院に入学した。与えられたテーマは、ゴキブリの性フェロモンの研究であつた。昆虫が好きな私にもこれは予想外で、青春の五年間ゴキブリと付き合うことになつてしまつた。チャバネゴキ

ブリを数十万匹の単位で飼育し、雄と雌を選別、処女雌が性成熟したところを抽出する作業に明け暮れた。衣服には独特の臭いが滲みつく。おかげで、耳かきに半分程のフェロモンを分離することに成功し、その化学構造も明らかになつた。以来、同研究室に職を得て、アブラムシ(アリマキ)、ハマシ、ミバエなど植食性害虫の研究を中心に取り組んでいるが、ようやく自由な時間もでき、再びアゲハやジャコウアゲハの飼育を始めたいのは最近のことである。当時とは比較にならない分析技術の進歩もあり、産卵刺激物質の全容が次第に明らかになつてきた。卒論が提出できるのも間近

# 社会人になって

寺西 秀美(大37)

「行ってきます!」朝礼後、すぐに上司と今日、明日の予定について簡単に打ち合わせを行い、あわただしく会社を出た。今から泊まりがけで東京出張、厚生省業務課事務局に向かうのである。開発中の医薬品について、処方案が薬事法上妥当かどうか、申請にあたり、どのような資料が必要かを質問するためである。医薬品を新しく開発する場合には、「医薬品製造指針」という本のルールに従わなければならないことが決められている。しかし、製造指針だけではわからない点もあるため、厚生省は週一回、面会日を決め、各企業の質問に答えることになつていく。新幹線で三時間、いつも伊吹山、浜名湖、富士山が近くと不思議と目がさめるが、この時がチャンスとばかり、東京まで気持ちよく寝て過ごす。

た一時がありました。今はなんのその、現住民のような顔をして職場にしっかりと根をおろし日々奮闘しております。

私は、滋賀県農協中央生活課に勤務しております。県の農協は中央会と三つの連合会(信用、共済、経済)から組織されて、中央会は連合会の指導を事業とし、企業と違った経営体系を持っています。

ここ数年、食品の安全性が問われている記事が新聞紙面ににぎわっていると思います。例えば、輸入食品のポストハーベスト問題、食品添加物の発ガン性、催奇形性の問題、牛への成長ホルモン投与問題など。

そこで、滋賀県農協は全国に先駆けて、安全な食品(低農薬の国産農産物や低・無添加加工

品)を組合員の方々へ提供する運動(新予約共同購入運動)を実施しており、大変喜ばれております。

ここで私は商品テストを担当しており、これは、組合員の方々へ食品添加物の知識を深め、さらに目で見て実際に確かめて頂くことを目的としています。最近では、魚の鮮度恒度(K値)を測定したり、ソルビン酸、BHAを検出するテストをし、新予約の商品と市販品との安全性の違いを目で確かめて頂きました。

今、農協批判があちこちで盛んに行われています。これから農協が生き残るためには、生活事業(

の事業そのものは農協にとつてすぐにお金をもたらすものではありません。)を発売に展開し、組合員の方々へ安心して利用して頂ける農協作りをめざすことが大切であり、私もその事業に関与しているので頑張つていかねばと痛切に感じています。

# 今私は... 厚生省訪問

西本 和実(大33)

「行ってきます!」朝礼後、すぐに上司と今日、明日の予定について簡単に打ち合わせを行い、あわただしく会社を出た。今から泊まりがけで東京出張、厚生省業務課事務局に向かうのである。開発中の医薬品について、処方案が薬事法上妥当かどうか、申請にあたり、どのような資料が必要かを質問するためである。医薬品を新しく開発する場合には、「医薬品製造指針」という本のルールに従わなければならないことが決められている。しかし、製造指針だけではわからない点もあるため、厚生省は週一回、面会日を決め、各企業の質問に答えることになつていく。新幹線で三時間、いつも伊吹山、浜名湖、富士山が近くと不思議と目がさめるが、この時がチャンスとばかり、東京まで気持ちよく寝て過ごす。

東京で営団地下鉄丸の内線に乗る。霞が関で降りる。霞が関駅と厚生省の庁舎とは地下通路で直結しており、駅からそのまま庁舎に入ることができる。面会するためには、前日に訪れて順番を取る必要がある。今正午、午後五時まで援助局の待合室の椅子に座って並ぶ。ポツポツとしゃべっているのは悔しいが、早目に来ないと、他企業の人がちがいで並んで、希望の時間を取れないので仕方がない。最近では退屈しないように本を数冊持っていくことにしている。

やっと五時になった。女子職員が順番に面接希望時間を紙に記入させ、同時に翌日提出する質問事項記入用紙を配布する。一日目は順番取りだけでツブレてしまう。やらねばならない実験が山積みしているのに...

働は十分間、このために貴重な二日間が丸々パーになってしまった。また仕事が遅れてしまった。一日目の順番取りが終わると、東京の内勤がバイトにやらせたらどうなんだ...お役人に会うのもこのように大変なのである。(小林製菓(株)勤務)

# 社会人一年生

尾鷲保健所 市川 博睦(院修3)

近では、魚の鮮度恒度(K値)を測定したり、ソルビン酸、BHAを検出するテストをし、新予約の商品と市販品との安全性の違いを目で確かめて頂きました。

今、農協批判があちこちで盛んに行われています。これから農協が生き残るためには、生活事業(

# 職場風景

尾鷲保健所 市川 博睦(院修3)

「主人をとらないで!」きのう女から電話がかかってきて、突然やられた。「え、なんですか?」って、うろたえてしまった。へんな言い方ばかりをつけてきて。今度電話があったらはどうしようか。電話が来たのは、午後五時頃。小林製菓様!「面接室に入つて一礼する。高の人が目の前に座っていた。彼は審査第二課のM氏で、社内では、仕事熱心で人柄が良いが、反面融通がきかないとの評である。質問時間はたった十分間。」「××の処方ではどうですか?」「××の申請にはこれらの資料だけでよいのか?」...手ざわつた。一日目の順番取りが終わると、東京の内勤がバイトにやらせたらどうなんだ...お役人に会うのもこのように大変なのである。(小林製菓(株)勤務)

八月の中頃、指頭検査について行く。街頭で客引きをしては、「すぐすむからね」とシヤレの寒天塔地に五指をつけてもらう。公衆衛生の啓発運動の一つ。さて、普段は紙とペンと電卓を武器にして一日の大半が過ぎてゆきます。そんな中でも、仕事を通じて様々な人と出合え、自分の知らなかつたことを見聞できるのは楽しい。

# 物故者

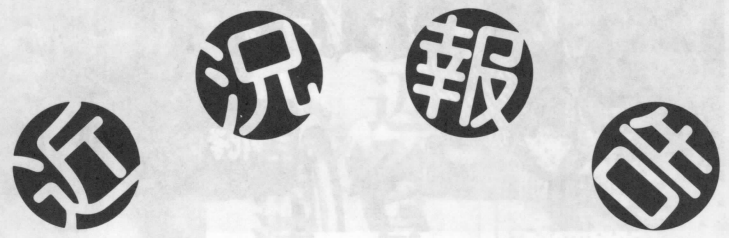
前田 尚氏(専2)は平成元年二月十八日病歿されました。



三翠化学会員の皆様如何にお過ごしですか。編集幹事の方から寄稿を依頼され、筆不精を顧みず日本の南の端沖縄より近況報告を致したいと思います。

先ず、近況の前に沖縄の卒業生と三重大学との関係から概要を説明します。卒業生を大別すると、三重高等農林時代の「戦前派」と戦後昭和三十五年卒より昭和五十五年卒までの「留學派」その当時は沖縄は米国の統治下にあり直接受験する事は不可能で国費・自費留學制度を利用しました。即ち、沖縄の地元で選抜試験(今日の共通一次試験に類似)を受け合格すると文部省より外国留學生受け入れのある大学に配属されます。三重大学は農業土木科を主として毎年一学年当たり一、二名在學しておりました。それと沖縄が日本に復帰して留學制度がなくなり自分で受験するようになった所謂「現在派」とに分けられます。

さて前置きが長くなりましたが、前述のように沖縄の卒業生を見てみますと戦前派が昭和十四、十六年卒に集中しており四名(農業化学相当は〇)おります。その中に三重高等農林時代に円盤投げで日本新記録を出し長く保持した宮城久茂氏(現も沖縄県の陸上競技連盟長として活躍中)である。又他の三氏も夫々沖縄の中枢で活躍しておられます。留學派は約四十名で沖縄在住が土木科卒十二名、農業化学科卒五名、農業機械科卒四名、医学部卒三名、工学部卒二名、他三名、本土在住が十一名であり圧倒的に土木科卒が多い。現在派の卒業生は今までの所は〇です。然しながら農学部が生物資源学部に変更になって最初の年に女子一名の學生が在學中ですが、実は小生の娘(長女)で奇しくも親子二代の同大学・同学科と云う事になりましたが諸先輩方宜しく御指導の程お願い致します。以上の事から当地沖縄では三翠化学会の沖縄県支部と云うのはなく三重大学沖



# 『沖繩版』

宮城 久茂(大14回卒)



繩県三翠同窓会の名称を、この親睦を図るの目的に全学部を同時に集めて定期的に開催しております。例えば夏期休暇を利用して三重大学の先生(松下先生、菊岡先生等)が琉球大学の學生に集中講義のため来沖された時とか、同出身の方々が公務で来沖された時とかの場合であり、その主体が殆ど土木系であり我々農業化学出身及び他学部出身はささか肩身の狭い思いをしております。然しながら農業化学出身の五名は日常の職場(民間会社二名、公的試験場一名、公務員二名)で元氣に沖縄の將來の發展のために頑張っておりますので御安心下さい。

最後に最近実施しました同窓会の内容を報告して締めました。平成元年四月十六日、元三重大学教務の山口平郎氏が三重県津からツアーでお嬢様とともに来沖されたのを期に約一年振りに皆んなが集まり旧交を温めました。山口氏と云えば我々沖縄出身の學生にとりましては、元厚生係の伊藤氏(故人)とともに一方ならぬお世話になり忘れ得ぬ人の一人であり、心よりの歓迎会を催しました。同氏は右も左もわからぬ我々沖縄學生(国外留學生扱い)を津駅まで出迎える事から始まり、下宿の話、日常の生活の相談まで家族同様に親身になってくれました。小生にとって同氏との一番の思い出は三重大学に入学して最初の正月(昭和三十七年)に三翠会館の前庭に沖縄の學生を呼び(殆どの沖縄學生が帰省出来なかつた当時、同氏の家族とともに「モチつき」)沖縄には正月にモチつきの風習はない)をした事です。同氏は今年で八十一才になるとの事ですが血色も良く矍鑠としておられます。今後益々お元氣で御長命であられん事をお祈り申し上げます。

「女子卒業生の職場紹介」  
最近女子の活躍が著しいが、当三重大学の農業化学コースでも、農学部三・四年生は女性の比率が30%であったものが、二年生は女子二十一名、男子十九名となり、男女逆転劇が演じられました。さて、これから先の卒業後の進路を配慮しなければならぬ訳ですが、日本の社会はまだ男性主体であり、また、女性の側にも「甘え」の体質が残っている、職場での問題も多いように聞いています。このような

「DC報告会に燃えながら」  
日本合成ゴム株開発センター  
清水 啓子  
私が現在取り組んでいるテーマは無機塗料の研究である。塗料といえば従来、有機塗料がほとんどであったが、硬度、耐候性、耐熱性などを売りのとする無機塗料の開発が進められている。そうした技術革新の最中に入社して以来三年間、私は毎日せっせとサンプルを合成し、ユーザーへ送付し、評価結果を待つ日々であった(商品名「グラスカ」。モノをつくる「合成屋」)として、試作品のレシ

ヤマモリ株式会社の紹介  
大22 木村(中世古)幸信  
昨年までヤマモリ食品工業株式会社に所属していたのですが、当社も他業に漏れずCIの一新として社名変更を行いました。気持ちの上では「食品工業株式会社」では食品を機械的に製造しているだけの工場イメージがつきまとうため、そこから脱皮を決定した結果の社名変更ですが、それなら「ヤマモリ食品株式会社」でも良かったのにとの声もあります。また、将来的には食品以外のやるかも知れんよといったスケベ根性も多

「新素材を求めて」  
三菱油化株 四日市総合研究所  
駒田 恵  
三菱油化株は、筑波と四日市に総合研究所をもち、四日市総合研究所はさらに高分子基礎・高分子開発・高分子応用・化学用品・新素材の五研究所からなりま。当社は、ポリエチレン・ポリプロピレンなどのプラスチック材料、スチレンモノマー・アクリル酸エステル等の化成製品を製造しており、プラスチック材料の研究開発を高分子三研究所で化成品の研究開発を化学用品研究所で行っています。そんな中でこれとは少し違った新分野の開発を行っているのが新素材研究所です。私はこの中のハイブリッドチームに所

「職場紹介」  
現在、上述したように、当社はしょうゆ醸造業への注力度は全社的に低下してきており、レトルト食品と、しょうゆを原料として使用するつゆたれ等の調味料が主力商品になっております。工場運営上はOEM(相手先ブランドによる委託加工)も

分野ですが、少なくともヤマモリは今そこからの脱却を図ってるところだと言えます。ここ数年の当社の行動を列挙すると、昭和六十一年レトルト工場前処理施設(主として野菜処理検品用)の新設、昭和六十二年しょうゆ工場自動製麹室新設、昭和六十三年タイに日清製粉(株)、タイ三菱商事(株)との合併会社タイ日清製粉(株)設立(二十六期の深田君が取締役として出向)、昭和六十三年 社名変更、平成元年 シンガポールにEagle Star社にてレトルトカレーを製造。液体小袋スープ工場新設。世界デザイン博名城会場にてカレーショップ・ヤマモリ



三翠化学会  
この新設学科は、三回生を送り出したのみで、その卒業生もわずか一六名、新制大学にかわってしまつた。

### 四十年前をしのぶ旧専会 初めての催し大盛況

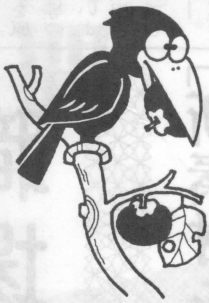
敗戦後の日本再興のため、食糧政策が国民的課題となり、二十一年四月、三重農林専門学校に農産製造学科が開校された。

ビガカたり、ラボスケール、パイロットスケール、最終的にプラント建設となることは感無量である。私のサンプルは鹿島の社宅のテスト塗装にとどまらなかつた。

### 大36クラス 第1回クラス会記

光陰矢の如し、時の過ぎ行くのは速いもので、我々大36クラスも卒業して一年が経過しました。

が、研究室に顔を出したり、昼食に行く者もいたりで、顔ぶれが揃つたのは午後一時を少し過ぎた頃でした。



強、尾崎安直、勝崎裕隆、神谷正剛、久保直直、窪田靖司、熊崎陽一、曾我元、高橋直巳、武田智子、谷口聖美、田宮敏昌、豊田敦、沼田竜一、林栄一、前田祥貴、松野光義、武藤秀弥、吉田明弘、若山秀人、以上二十四名、出席簿順です。

### 大七回 クラス会 三十周年クラス会開催

今年、我々大七回生は卒業三十周年に当たり、津でクラス会を開こうという事になりました。

### 製造科卒業生の集い

昭和二十一年四月戦後の混乱と廃墟のなかで、三重農林専門学校に農産製造科が開校されました。その後幾多の変遷をたどり、現在三重大学生物資源学部農芸化学コースとして、発展し幾多の人材を輩出していることは同慶の如きです。

い今後の活躍と健勝を期するのの一泊をはさむ会合を計画しました。期日は四月十五日(土)十日(日)にわたる、鳥羽市答志島和具海岸「やま安」で三十七名の参加を得て実現することができました。ところが、十五日当日はかなりの風雨が激しく交通機関の遅延や舟便の欠航も懸念されましたが、広島からまた東京から夫人同伴で馳せ参する者もあり、実に四十年ぶりに再会するという感激の場面もありました。

あることを痛感いたします。久しぶりに再会した友の容姿や変貌に、かなりの時間と時代が刻まれている感じが、いろいろと欲談しているうちに若き日の面影がそっくり甦るのを感じえます。お互いの地位や立場にこだわらず遠慮なく話し合ったこと、楽しむ機会が、おそろく他の社会や人間関係ではありえないことであつて、齢とともにこういった会合に参加することに大きな意義を見出します。



次回(五十五才の「節目」)を記念して三年後、新幹線の停車する豊橋近辺で泊まり掛けて開催することになり、幹事に平塚氏をお願いして夕五時半、名残を惜しみつつ、三年後の再会を約して散会した。(記 今井)

会長挨拶(第一面)にもありますように、会の運営には資金が必要です。納入状況・振替用紙等同封します。御協力のお願ひ申し上げます。(会計幹事)